

## 第Ⅲ章 東門ほかの発掘調査

### 第1節 東門の発掘調査

#### 1、調査前の状況

鬼城山と称する山塊はすり鉢を伏せた形状を呈し、準平原となる城内の標高は北西側が高く、南東側が低い地形にある。東門はこの南東部に位置し標高約290m、山麓の阿弥陀原集落との比高差は220mを測り、城域のなかでは最も低位置に所在している。

東門周辺の城壁線を概観すれば、まず東門から南へ約180m離れた位置に、巨大な露盤を基部に取り込み壁面の三方を石垣で構成した突出部があり、東側面には地形に即応して構築された出隅と入隅が認められる。

この突出部から東へ約120m離れた谷部には第4水門が位置している。第4水門は城内の最も深い谷を扼し、おのずと流水面積も広大であり、谷を遡上すれば堤防を伴う貯水池と繋がっている。最も水量の多い当該箇所には、長年の流水の勢いに抗しきれず、かつて第4水門の上部を構成した版築盛土はすでに流出し、現在、下部の石垣が露出するなど半壊状態にある。

城壁線は東門から30m離れた北東側、すなわち第53壘状区間で鋭角に内折するが、自然地形を取り込み城壁構造も多様化する。たとえば、平成14年度に確認調査を実施したT21・T22（P77、第35図参照）が位置する尾根稜線には、一見夾築式の城壁線を思わせる自然地形の高まりが約50mも延々と認められ、T23周辺（P78、第35図参照）も断崖となる箇所が連続するなど、これらを城壁の一部として取り込み活用したことは想像に難くない。

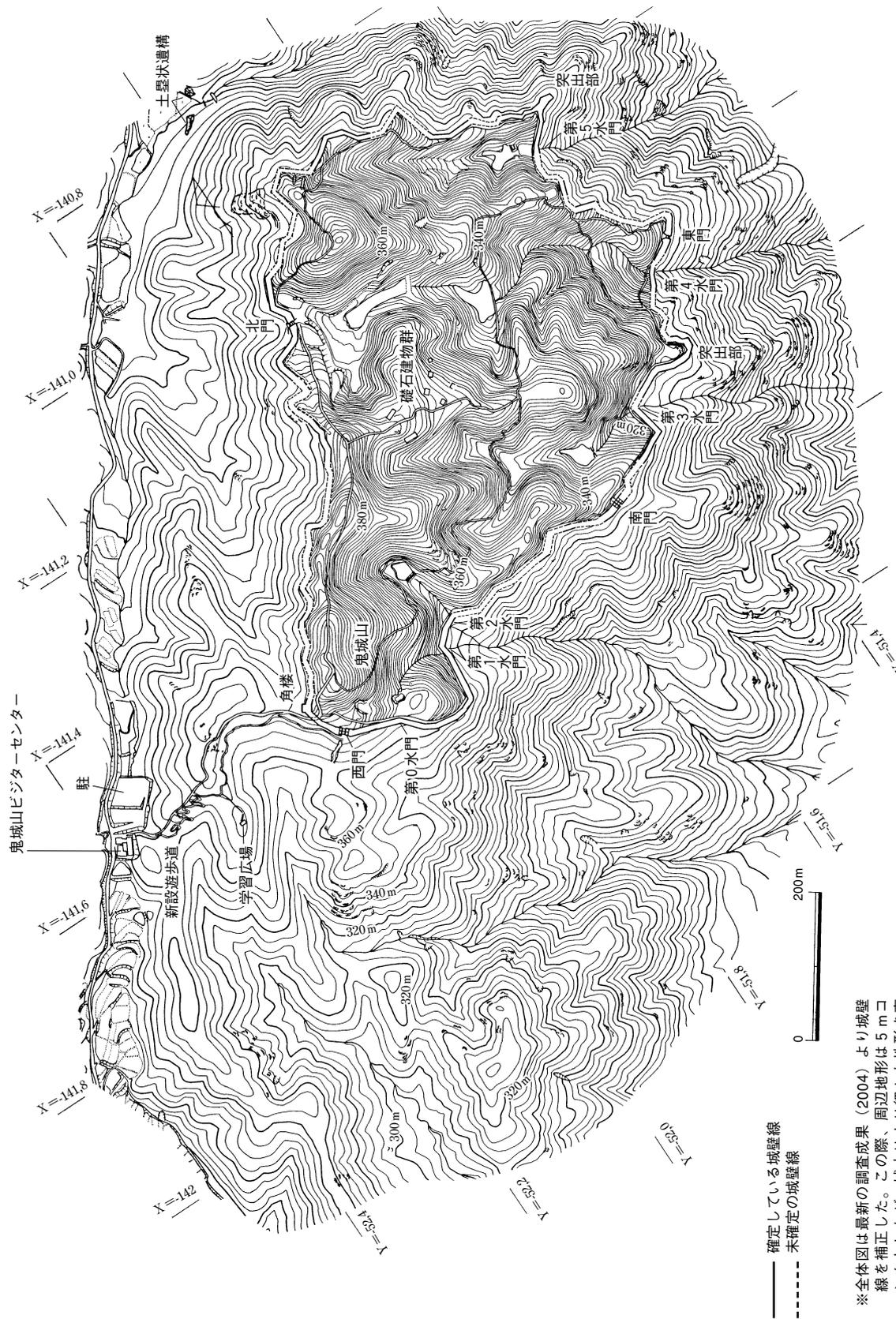
こうした自然地形を巧みに取り込みながら第5水門へと至るのであるが、水門のみならず城内へ約30m離れた西側には、貯水池と堤防が良好に残存しており、各遺構が至近距離であることから貯水池—堤防—<sup>みずみち</sup>水道—水門という一連の水利系統をつぶさに観察することが可能である。

さらに、第5水門から東へ50mの位置には、通称「屏風折れの石垣」と呼ばれる突出部が所在している。城壁線の鋭角な屈折点でもある当該地には、石垣で構築された突出部が城外に向かって長さ約25mも張り出しており、突出部の上面には2列に平行する内側列石と、その間に敷設された内側敷石の残痕が確認できるなど、鬼ノ城の中でも特殊な遺構であることがうかがえる。

鬼ノ城で最も低位置にある東門からは、これらの突出部を遠望することができるため、個々の遺構のみならず、相互の有機的な関連を評価することが望まれる。また、東門と近距離にある第4水門から谷を遡上すると最短距離で北門へ到達できるため、城内動線も積極的に考えるべきであろう。

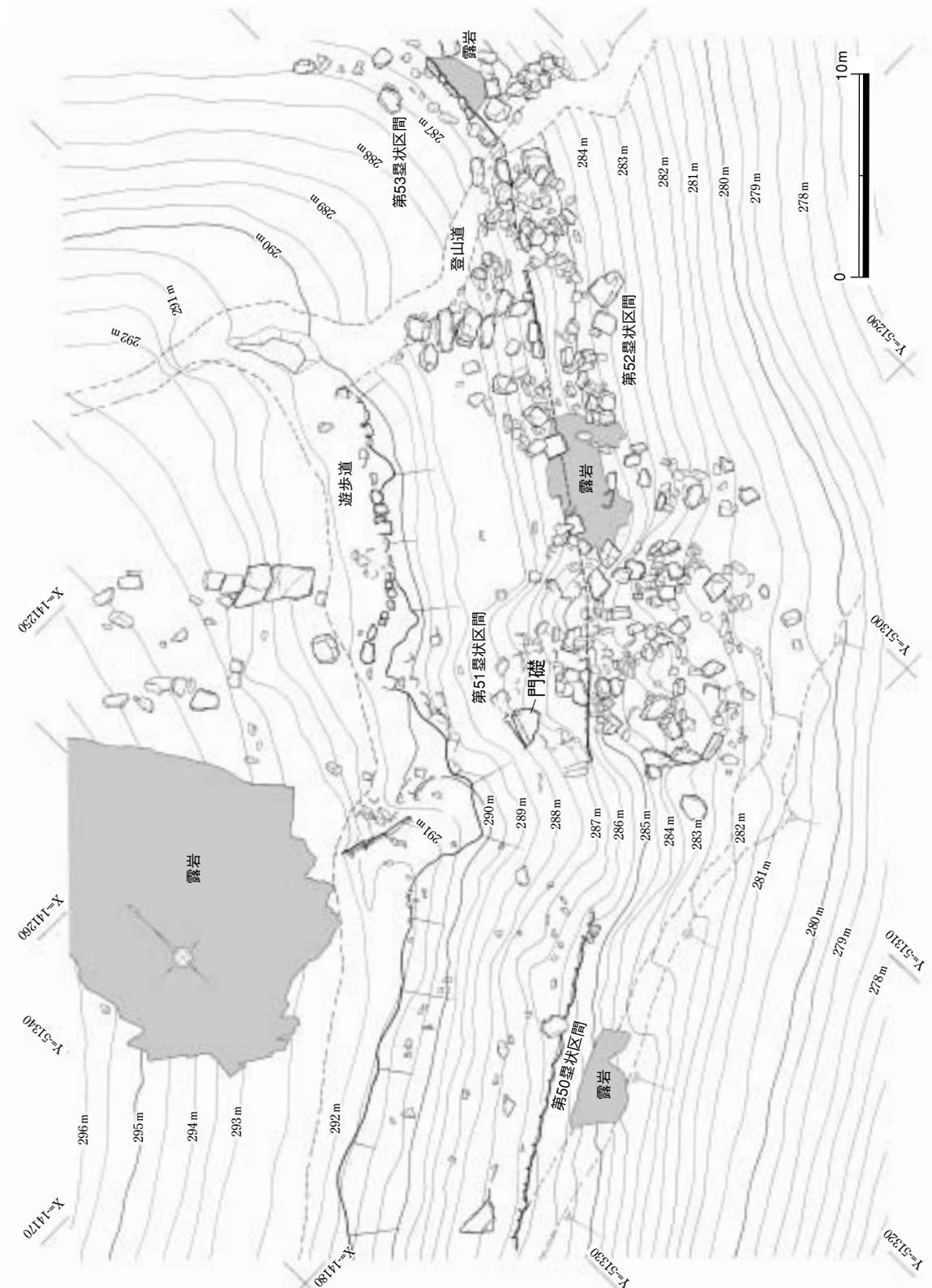
次に調査前の状況について述べたい。調査対象となった第50壘状区間から第53壘状区間の城壁は、傾斜変換線に位置し、城壁構造も把握できないほど急峻な斜面になっていることから、崩壊がかなり進行していると予想された。唯一、城門の南西側には瘤状に張り出した地形が認められるだけであり、土塁の形状をイメージさせるものではなかった。

第50壘状区間では外側列石が良好な状態で露出しており、城壁の前端線として認識できるのであるが、外側列石線よりも城外側は一部岩盤が露出した斜面となり、城外に及ぶ造成空間も観察できな



第3図 鬼ノ城全体図 (S = 1/8000)

※全体図は最新の調査成果(2004)より城壁線を補正した。この際、周辺地形は5mコンタとししたが、城内はより細かな地形を表示し遺構との関係を反映すべく1mコンタで表示している。

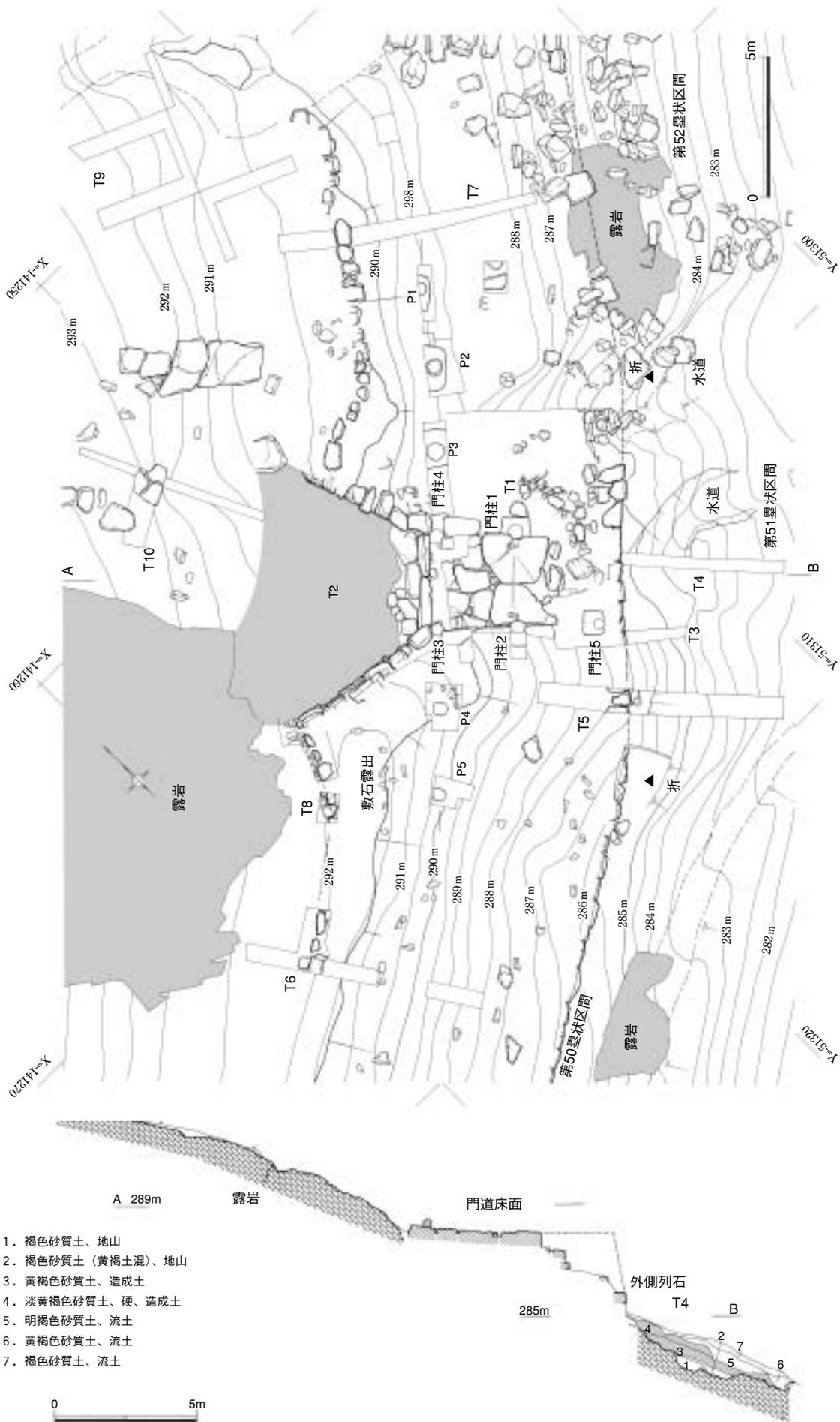


第4図 東門付近調査前平面図 (S=1/300)

った。また、城壁本体となる斜面地には小石が散乱している状況がうかがえた。

第51塁状区間は城門の比定地である。報告書『鬼ノ城』のとおり土塁間に切れ目があり、2段の石垣が城壁主軸に対して斜交するように築かれていた。その反対側にも転石の不自然な並びがあり、後に門道石垣の石尻が露出していたことが判明する。

新たに発見された門礎は斜面の形状に添って傾いており、山側の割れ口が新しく同一石材の門礎が、



1. 褐色砂質土、地山
2. 褐色砂質土（黄褐土混）、地山
3. 黄褐色砂質土、造成土
4. 淡黄褐色砂質土、硬、造成土
5. 明褐色砂質土、流土
6. 黄褐色砂質土、流土
7. 褐色砂質土、流土

0 5m

第5図 東門 平・断面図 (S=1/200)

堆積土に埋没している状況がうかがえた。そして、この城壁の切れ目には外側列石が露出し、東門に使用していたと考えられる石材が、外側列石付近から城外側の下方に向け転落し円錐状に広がっていた。

第52壘状区間では外側列石が頭部から中央にかけて配列されていたが、外側列石線付近には転石が集積しており、城壁に伴う何らかの遺構が崩壊し転落したと想定する以外には説明できない状況である。一方の中央から尾部にはほとんどの列石が崩落しており、かろうじて露岩上に配置された2石のみが残存していた。しかし、これとても外側列石自体が傾斜し、原位置からズレを生じていると判断される。

城内側には外側列石と平行して、内側の石列を確認することができ、石尻が地表面に露出していた。

第52壘状区間から第53壘状区間へは、露岩上に配置された外側列石が明瞭な折れをもって接続している。しかし、この外側列石の後背地には巨岩が露頭するなど、すでに城壁の形状を留めておらず城壁構造も不明と言わざるを得ない。

## 2、東門

東門と関連するトレンチはT1、T2、T3、T4である。T1とT2はトレンチ設定後、拡張を行っているが特に名称は変更していない。

### 外側列石（第6図参照）

第51壘状区間の外側列石は頭部を除き、良好に残存しているものと予想される。第51壘状区間と第52壘状区間の外側列石を延長させた交点を推定「折」とし、第50壘状区間の頭部で検出している尾部の折をもとに計測すれば全長14.5mと推定できる。この外側列石は直線を指向しつつも中央付近から折にかけて城外側へ膨らむような形状をしている。

外側列石の上面には版築盛土が残存していたが、東門の東側は後世の水道となり大きく抉られ遺構検出面においても上方からの転落石が集まっていた。一方、T4の土層断面図（第5図）により城外側の状況をみれば、造成土は硬く締まった3層の黄褐色砂質土と、4層の淡黄褐色砂質土が考えられる。したがって5層以上は全て流土堆積であり、4層上面から外側列石までに高さ約50cmの高低差があることから、4層以上の造成土は流出した可能性が高く、T4から東側へと延びる溝も城門崩壊後の水道と考えられる。

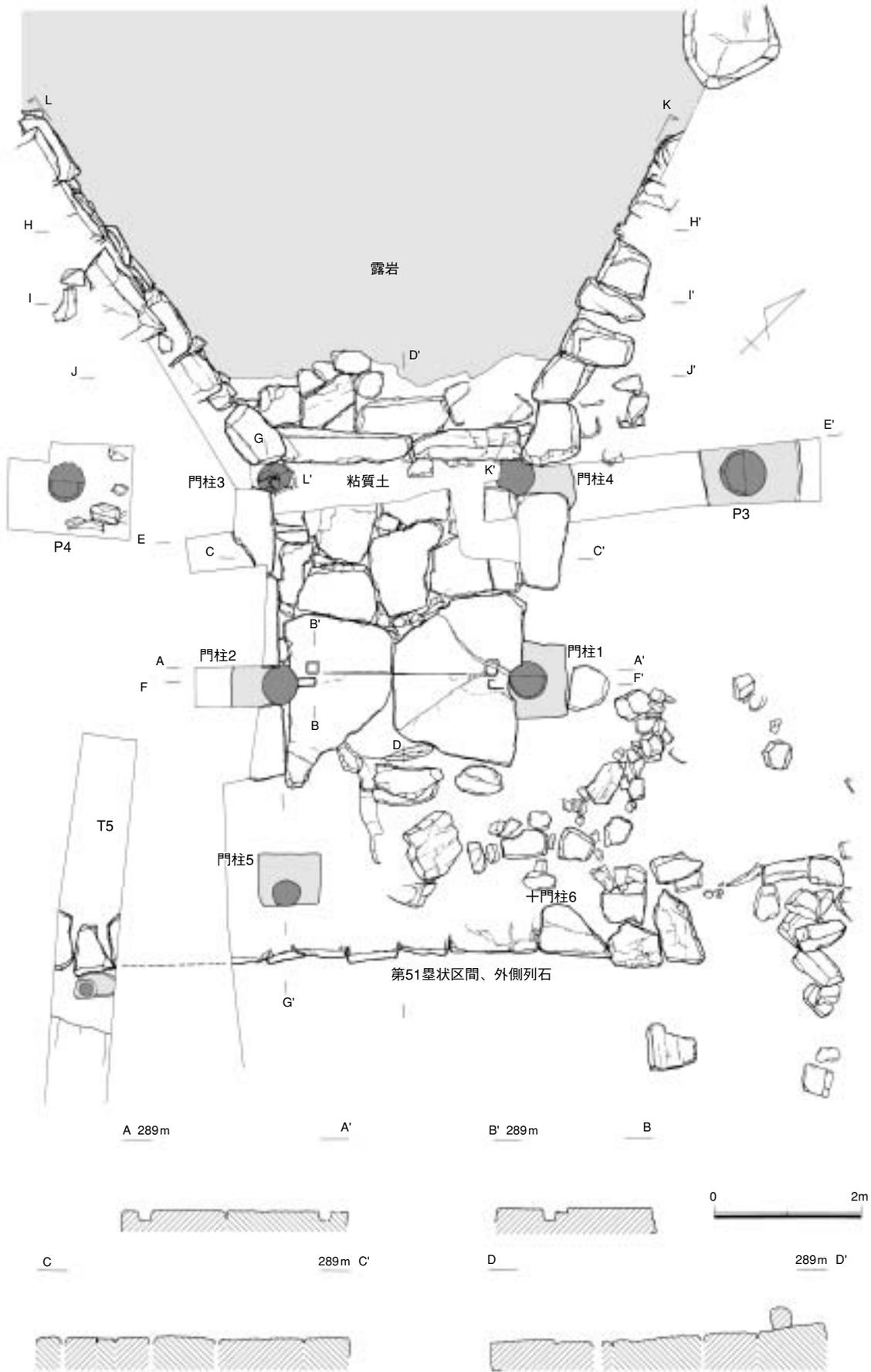
### 門道床面（第6図参照）

門道床面は全て石敷である。断面形状は石敷の城内側が露岩と接し、城外側は必然的に地山が下降するため、外側列石以上の版築盛土によって水平面を形成し、その後石材を配置している。

石敷は門道床面の長軸を示すD断面が約3°の下り勾配で、短軸側のA・C断面は水平を示すなど極めて水平を指向しており、この門道床面から外側列石の下端までは約2.5mの高低差がある。

門礎は2石で構成され円形刳形、方立、軸摺穴、蹴放しが加工されている。以下の説明は城内から城外に向かって左側門礎、右側門礎と称することにした。

まず、左側門礎は2.3×1.7mを測る台形を呈し、一枚石が3石に割れている。左側門礎と右側門礎の接合面は共に直線的である。円形刳形は長さ48cmにわたり円弧状に加工され、側面加工は門礎の上端を水平と仮定し、下端に向けて測角すると約8°内傾している。方立は長方形を呈し長さ22cm、幅11cm、深さ5cmを測り、底部は極めて平坦である。軸摺穴は隅丸方形を呈し、一辺が18cm前後、深さ14cmを測る。



第6図 東門 平・断面図 (S=1/80)

右側門礎は2.3×1.4 mを測る台形を呈し、城外側の側面には割れが認められる。円形剝形は長さ42 cmにわたり円弧状に加工され、側面加工は下端に向けて約11°内傾し、側面の中央がやや反っている。方立は長方形を呈し長さ25cm、幅11cm、深さ9 cmを測り底部は平坦である。軸摺穴は隅丸方形を呈し、上面幅18cm、深さ14cmを測る。これらの加工痕により軸摺穴の心々距離は2.44 m、方立間は2.6 mを測る。2石の門礎には蹴放しが長さ約2 mにわたり加工され、高低差約5 cmの段となっているが、左側門礎の割れに伴い蹴放しの一部が剥落している。

石敷には通路となる門道と、壁面下に埋没する石敷がある。埋没する石敷は門柱3—門柱2—門柱5の通りに合わせて版築盛土の下に3石が存在し、門道石敷とは直線的に目地を揃えている。この石敷上には後述のとおりE断面において板壁痕跡が確認されていることから、壁面の構築と対応させた配置と考えられる。対する門柱4—門柱1にも1石のみが残存しているが、左側門礎の側面と目地を揃えている状況を勘案すれば、本来は埋没する石材が門柱6に向けて存在したとみてよい。これらの石材はC断面やG断面のとおり水平で、門道石敷と一体的に配置されていることが判るが、城門完成時には壁面下にあり視認することはできない。

次に門道石敷は門礎から城内の露岩に向けて丁寧に配置されており、石敷直上には門柱3から門柱4に向けて長石を2石設置している。長石はそれぞれ長さ150cm、幅40cm、いま一つは $190 + \alpha$  cm、幅50cmであり石敷から約30cm高く、長石の両端はハ字形に開く石垣端部との接点にもなっている。この長石自体、城地で散見する石材としては特異なものであり、他の城門や城内外の列石、敷石ひいては石垣、水門の下部石垣と比較しても希少である。

長石から門道部には石敷上面に淡黄灰色粘質土が堆積しており、調査時は門道石敷上へ意図的に被覆したものと考え、粘質土以下の石敷を未検出とした。しかしながら、城門の機能停止後に土砂が流入堆積する過程では、長石と露岩間に堆積した土砂を越えてオーバーフローした流水に混じり、粘質土が当該箇所へ堆積し固着したとも考えられ、西門・南門・北門においても粘質土を被覆した痕跡は認められず、現段階では評価に疑義を呈せざるをえない。

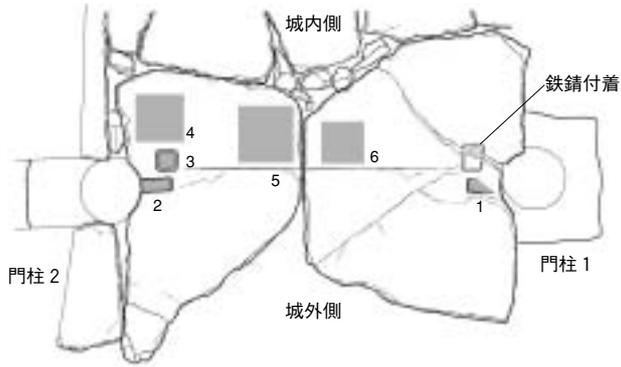
門礎から外側列石までの約2 m間は土砂の流出に伴い門道石敷が崩落している。そのため、外側列石から露岩と接する門道石敷の規模を計測すると長さ8 m、幅は3.3 mを測り、ハ字形石垣を含めた内部空間は全長11.8 m、床面積は約47.8 m<sup>2</sup>である。

なお東門の中軸線（第6図D断面）は外側列石線と直交し、その交点から頭部と尾部の折までが約7.2 mを測りほぼ等間隔であること。また、内側柱穴列も外側列石線と平行してP2とP5で折になることや、M字形を呈する城内側の石列も、外側列石や内側柱穴の折と軸を一にして内折している状況を勘案すれば、第51塁状区間は当初から東門の構築を前提とし、中軸線（第36図）を基準として構築されたと考えられる。

#### 門礎の加工痕（第8図参照）

東門の門道床面は石敷で構成され、本来は門柱5・6付近まで敷設されたと考えられる。床石は花崗岩の自然石を多用して、水平になるよう配置されており、中でも門礎が最も規模が大きく、円形剝形、軸摺穴、方立、蹴放しのセットが入念に加工されている。そればかりか門礎の側面が桁方向に向けて直線的であることや、接合面の密着状況から意図的に整形された可能性がある。そのため可能な範囲で加工の顕著な部位を中心に採拓することにした。

1は左側門礎の方立で、底部の拓本である。底部が平坦になるよう入念に仕上げられ、加工痕は不



第7図 門礎拓本位置図 (S=1/60)



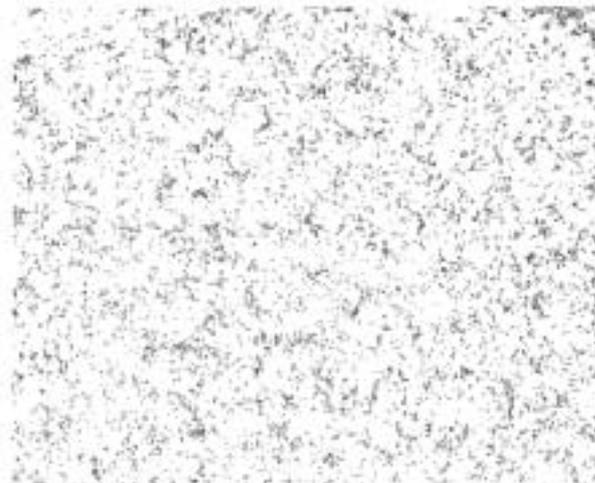
1 左側門礎方立



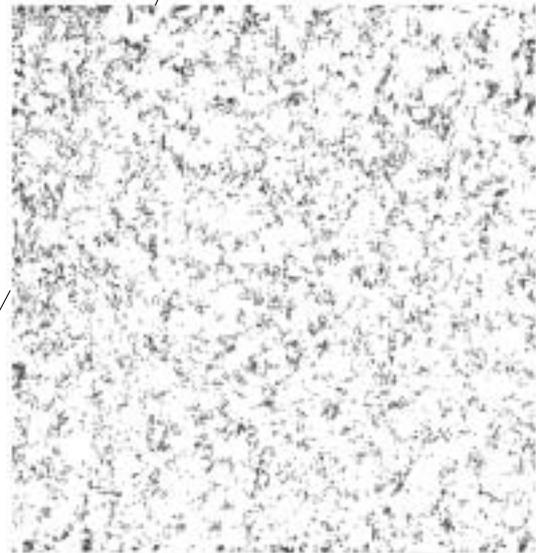
3 右側門礎軸摺穴



2 右側門礎方立



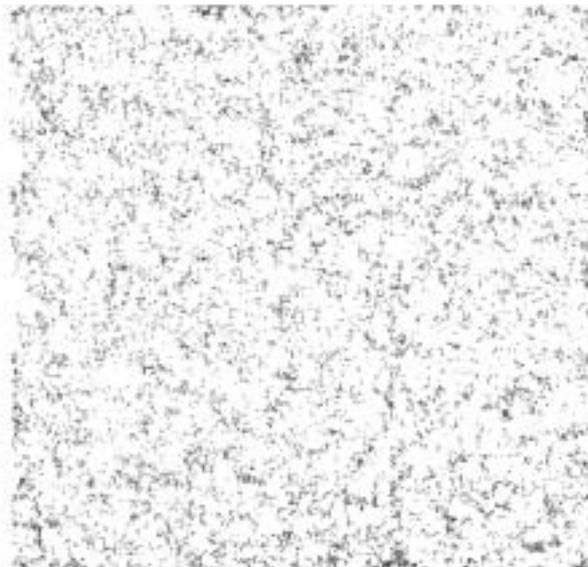
4 右側門礎



加工密

加工粗

5 右側門礎



6 左側門礎

0 10m

第8図 門礎拓本 (S=1/4)

明瞭であるが、城外側の側面際には径約1cmの円形痕が連続し、底部よりもやや深く加工されていた。

2は右側門礎の方立で、底部の拓本である。底部は平坦に仕上げられ、側面際の3方はわずかに深くなり、この部位には径約1cmの円形痕が筋状に連続している状況が窺えた。

3は右側門礎の軸摺穴で、底部の拓本である。底部には径約1cmの円形痕が無数に認められ、手触りでも凹凸が明瞭に確認できる。対する左側の軸摺穴底部には鉄錆が付着しており、左右の軸摺穴には底部に加工痕の摩滅が認められないことから、何らかの受けを設置したと考えられる<sup>(1)</sup>。

4、5は右側門礎の蹴放し下段の拓本である。4は平滑に加工されているため円形痕はすでに不明瞭となっている。5は門礎の接合面から約30cmの範囲で円形痕が明瞭に観察でき比較的粗であるが、反対にこの範囲外には加工が密となり平滑に仕上がっていた。

6は左側門礎の蹴放し下段の拓本である。4と同様に径7mm程の円形痕が認められ、特有の凹凸が不明瞭になるほど丁寧に加工されている。

なお、蹴放しの際には円形痕が連続し、わずかに深く痕跡を留めているが、蹴放しの側面は西門に較べて荒い仕上がりである<sup>(2)</sup>。

以上の加工痕は円形で径1cm前後の形状を留め、特に軸摺穴の底部や方立、蹴放しの側面際で顕著に確認できた。また蹴放し下段は円形痕が明瞭に認識できないほど密に加工・調整されている。これらの加工痕は「ノミ小叩き技法」により形成された可能性があろう<sup>(3)</sup>。

#### 門柱（第6、9図参照）

東門の門柱は全て掘立柱式で丸柱を採用し、欠失した門柱6を含めると計6本で構成され、規模は間口2間（5.65m）、奥行1間（3.3m）である。これらの柱穴掘形は全て、門道石敷の配置に先行して立てられていた。

門柱1の掘形は方形を呈し長さ1mを測る。地山より1.3m上位の位置から掘り込み、掘形の壁面は垂直に近く底部も平坦に整形されている。掘形内には円形を呈した柱痕が検出され径40cm、深さ1mが残存していた。柱痕の埋土は軟質で、腐朽に伴う掘形埋土への浸食により、柱痕の上半が大きく崩れていた。掘形埋土は砂質土と粘質土を互層状にたたき締め、掘形上面にはさらに粘質土を根巻きしている。この掘形上面から門礎の下端までは15cmの層厚があるため、柱立ての後さらに盛土を行い門礎を配置したと考えられる。

門柱2の柱痕は円形を呈し径45cm、残存高1.9mを測る。第9図F断面によれば門柱2は門礎上に13～15層の流土が堆積した後も立っていたことが窺え、抜き取りの痕跡は認められない。柱穴掘形は門礎の下端から15cm下の位置より検出しており、形状は方形と考えられる。

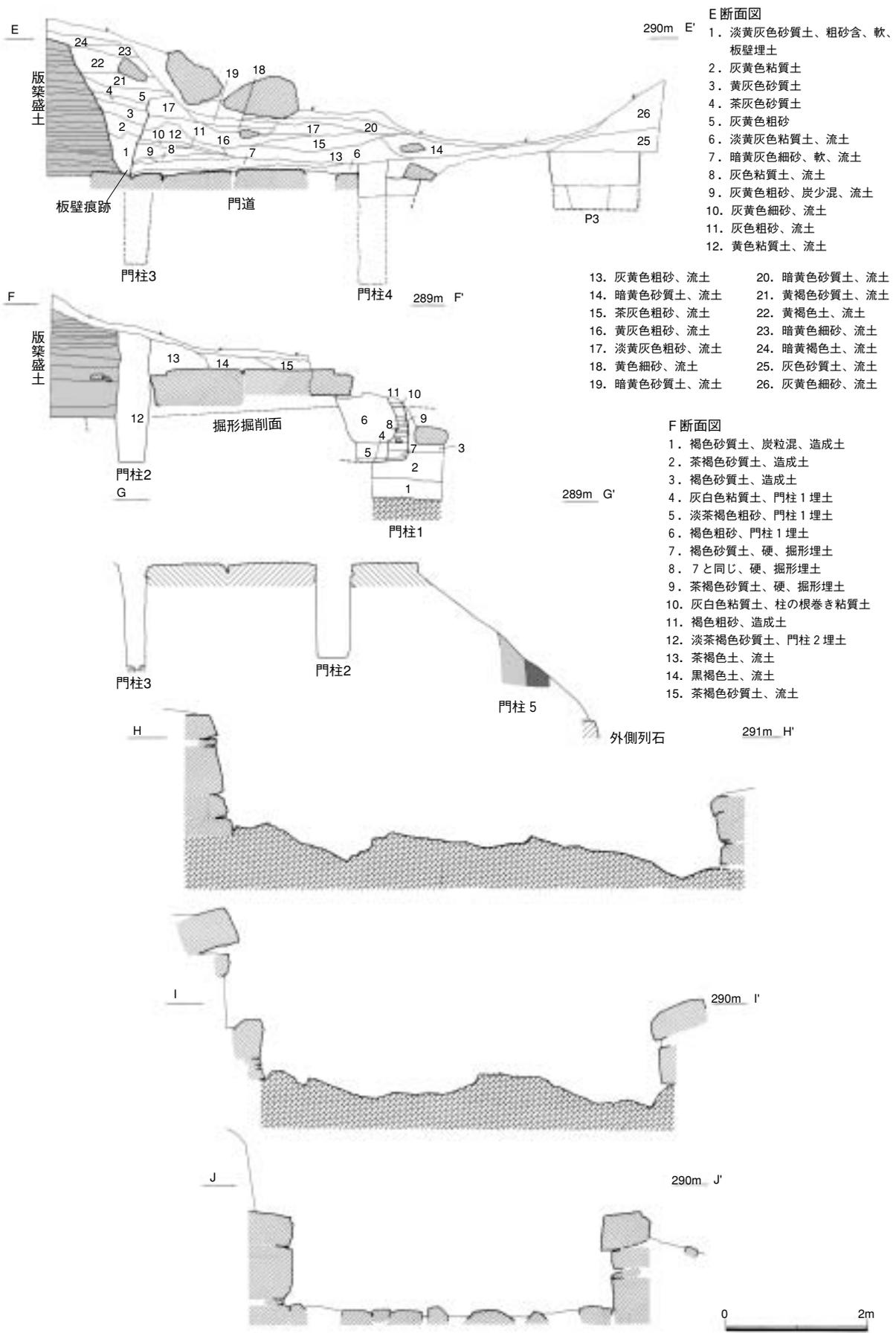
門柱3の柱痕は径40cm、深さは石敷から1.3mを測る。柱痕のみを掘り下げたところ、底部には礎盤石として使用された石材を検出した。

門柱4の柱痕は円形を呈し径40cm、深さ1.7mが残存しており、方形と考えられる掘形を検出した。第9図E断面から門柱4も6層の流入堆積までは残存していたことをうかがわせる。

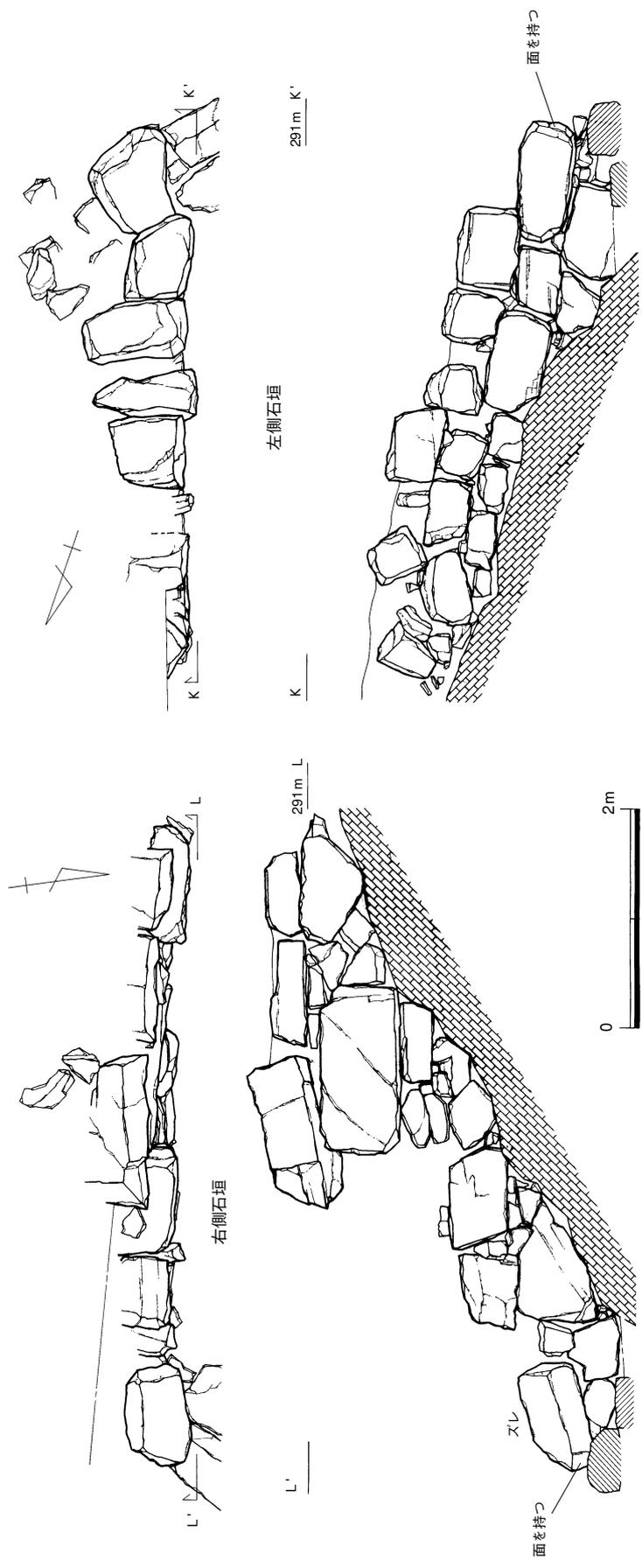
門柱5は版築遺構面で検出され、掘形は方形を呈し一辺85×70cmを測る。径35cmを測る柱痕は、掘形の南東端に偏在していた。

門柱6は掘形の形成された版築盛土自体が、水道により大きく抉られているため、すでに欠失したものと考えられる。

#### 板壁痕跡（第9図参照）



第9図 東門断面図 (S=1/80)



第10図 ハ字形石垣 平・断面図 (S=1/60)

第9図E断面では門柱3側においてV字形を呈する層を確認した。このV字形断面の底部は、門道の壁面によって埋没する石材の端部に位置し、底部幅は10cmを測る。門道に堆積した流土とは明らかに異なる別の単位であり、内部には1～5層が堆積している。位置関係が最も信頼できる底部の状況と、V字形断面のすぐ背後に版築盛土が検出されていること、そして壁面下に埋没する石材と門道石垣との間に目地が揃うことからV字形断面の性格は板壁痕跡と考えられ、その最も純粋な姿が底部位置に残されている。板壁は東門の機能停止後、6～17層までの堆積土が高さ約1mに達するまで何らかの形で形状を留め、板壁の腐朽と共に版築盛土と門道の堆積土を浸食しつつ1～5層が順次堆積したものと考えられる。

門道壁面の石垣 (第6、10図参照)

門道石敷から城内側には、平面がハ字形に開いた石垣が構築され、幅は3.5～8.4mを測る。石垣は長さ13m以上もの巨大な露岩を取り込み、露岩の直上に根石を設置している。ただし根石の設置に際し、露岩を段状に整形したか自然のままなのかは判然とせず、内部の露岩にも整形された痕跡を見出し難い。

石垣は門柱3と門柱4を指標とし、柱に添わせるように石垣を構築しており、石垣の端には前述のとおり長石が梁方向へ2石配置さ

れ、門道の内部空間を仕切っている。そして門柱 3、4 を境として門道壁面が、板壁から石垣へ変換することから、城門構築上の重要なポイントとして認識される。

#### 左側石垣（第10図 K 立面、第 9 図）

左側石垣の平面は桁方向を主軸とした D 断面のラインから、北東方向へ $24^{\circ}$  外折しており検出長 4.9m を測る。左側石垣は門道石敷から残存高までの高さが 2.15m を測り、石垣の頂部は右側石垣よりも約 1 m 低いことから、天端の形状を留めず築石がかなり崩落していると考えられる。

石垣は 4 段分の築石が残存しており、 $18^{\circ}$  となる露岩の勾配に合わせて石垣の横目地も傾斜している。築石の石面を観察する限り、石面幅 0.4～1 m の範囲で極端に大きな石材は認められず、むしろ均質な印象をもち、裏込石も K' 側の石垣背面において部分的に露出していることを確認した。また、築石の配置は上端が露出している 5 石分が判明しているのみで、横長と縦長に寝かず築石が認められるものの、構築方法を解明するまでには至っていない。

断面は、まず J 断面が石垣高 1.3m を測り、ズレを生じた上部の築石を除き、下部の勾配を計測すると $90^{\circ}$  である。I 断面は高さ 1.2m を測り、根石自体も $95^{\circ}$  に傾いている。H 断面は高さ 1 m を測り、上部の築石が傾いているため勾配は $96^{\circ}$  である。

#### 右側石垣（第10図 L 断面、第 9 図）

右側石垣は主軸線から南西方向へ $37^{\circ}$  外折し検出長 5.8m を測る。高さは天端を構成する 3 石が原状の高さを保持していると思われ、門道石敷からは約 3 m を測る。石垣は L' 側が大規模に崩壊し、残存形状は勾配が $30^{\circ}$  となる露岩に対して水平方向に石垣の横目地が揃っており、石面からうかがえる築石の規模自体も幅 0.3～1.5m と石材に大小があり、左側石垣とは対照的である。

断面は J 断面が高さ 1.25m、勾配は $90^{\circ}$  であるが、下から 2 段目の築石はズレを生じている可能性がある。I 断面は高さ 2.45m を測り、天端に相当する築石と 2 段面の築石はズレを生じている。H 断面は下部から上部にかけて完存していると思われ高さ 1.65m、勾配は $78^{\circ}$  である。

### 3、城壁線の調査（第 4・5 図参照）

#### 各壘状区間の概要

第50壘状区間には調査前より外側列石が露出していた。しかし、折が不明なため頭部と尾部付近に小規模なトレンチを設定した結果、頭部に第50壘状区間との折を確認した。また、土塁の断面調査として T 6 を設定したところ、版築盛土や土石混合の造成層、そして城内側には石列を検出した<sup>(4)</sup>。

以上の遺構から判断して第50壘状区間の規模は長さ約 $16.4 + \alpha$  m、幅 9.4m、高さ 5.1m を測る。なお、第50壘状区間～第52壘状区間の城内側で検出された石列については、性格が不明なため、内側列石とは区別しておきたい。

東門が位置する第51壘状区間には梁方向である門柱 3 と、門柱 4 の通りに合わせて P 2～P 5 の内側柱穴を 4 本検出した。

次に城壁の前端を示す外側列石に対して、後端にはハ字形石垣から延びる石列を検出しており、石垣を含めた平面形状は M 字形を呈している。こうした石列の屈折は、東門の構築空間に合わせて城壁幅が拡幅されたことを示し、T 8 では石列と内側敷石のセットを検出した<sup>(5)</sup>。

検出した遺構の中で「折」に着目すれば、外側列石の頭部に位置する推定折と、内側柱穴の P 2、そして城内側の石列は、第51壘状区間との結節点として一様に揃っており、対する尾部側も外側列石

や内側柱穴のP5、そして城内側の石列が内折している状況がうかがえる。

以上をもとに第51壘状区間の規模を計測すれば全長14.5m、高さ約6m、最大幅約11.5mを測り、外側列石の尾部内角は165°である。

第52壘状区間は頭部付近を中心として外側列石が確認できる。当区間と第53壘状区間の折は、列石線の方向性から現遊歩道に位置していたと考えられ、推定される頭部から尾部までの全長は約21.2m、高さ5.3m、尾部内角は170°を測る。一方、城内側にも外側列石と平行して石列が配置されており、長さ9.3mが残存していた。また、土壘中には内側柱穴のP1を検出し、P2を折として内折すると考えられる。

#### 内側柱穴（第11図参照）

第50～51壘状区間の版築土壘において内側柱穴を5本検出した。P1～3は柱穴掘形を検出したが、P4とP5は版築盛土が良好に残存していたことから掘形に達せず柱痕のみを検出した。

内側柱穴は東門の梁方向である門柱3と門柱4に柱通りを揃え、しかも、P1はP2を折として約170°で内折している。またP2～P5の内側柱穴は第51壘状区間の外側列石線と6.5mを隔てて平行しており、東門の主軸線と直交する事が特徴である。なお、第50壘状区間の内側柱穴は未検出ながら、外側列石が次区間へと連続している状況から判断して、P5が折となる可能性があろう。

柱間距離はP1からP2が2.8m、P2からP3は3m、P3から門柱4までは3.1mである。また門柱3からP4は2.8m、P4からP5は3mを測る。

P1は版築盛土を掘り込んで形成され、柱穴掘形の形状は方形を呈し側面は垂直に近く、底部も平坦になるよう整形されており、規模は長さ1.28m、深さ38センチを測る。また掘形の底部には25cm前後の小石を環状に配した礎盤石を検出した。柱痕は円形を呈し、最小幅となる径は39cm、深さ70cmを測る。埋土は層厚25～37cmを測る9層が主体を占め、その上層には層厚5cm前後の6～8層が盛土されていた。そして6層の掘形上面には硬く締まった4・5層が柱痕の周囲に根巻きされ、その後、掘形は版築盛土により埋没する。

P2は版築盛土を掘り込んで形成され、柱穴掘形の側面は傾斜し、底部は地山（岩盤）に達して段になっていた。掘形は検出状況により長方形と推測され、長さ1.55cm、深さ1.04cmを測る。

柱痕は円形を呈し底部径42cmを測り、検出面から深さ1mが残存していた。掘形埋土は立柱に際してまず13～15層が埋め込まれ、立柱後埋土の主体をなす10層と11層が充填されている。

P3の柱穴掘形は検出状況から方形と推測され、掘形の側面は垂直に近く底部も平坦に整形しており、規模は長さ1.36m、深さ65cmである。柱痕は円形を呈し径45cmを測る。

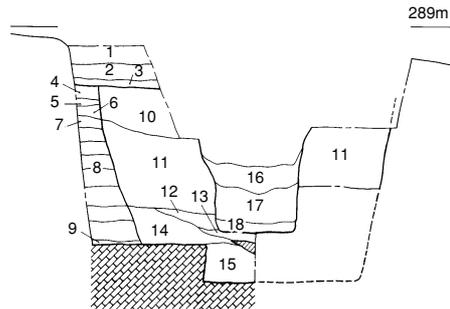
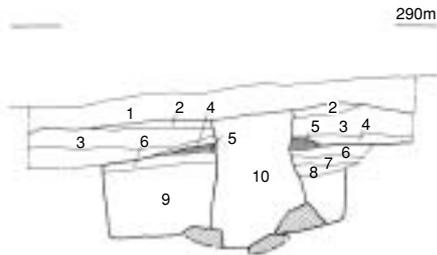
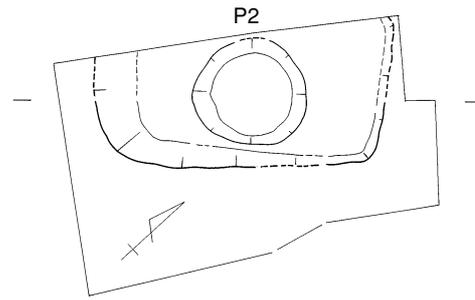
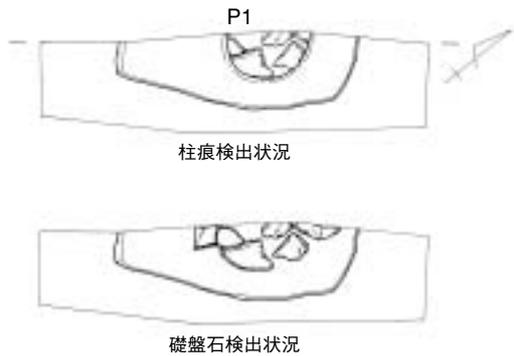
P3の検出当初、門柱の一部ではないかとの疑念からT1を拡張し、桁方向に対となる門柱を精査したが検出できなかった。また、門柱1～5の柱穴底部とP3の比高を計測すれば約1m近い高低差があり、門柱とは自ずと柱の性格が異なるため、P3とP4は内側柱穴と考えて良い。

P4の柱痕は円形を呈し径37cm、検出面から深さ2.3mまでを確認し、その一部を図化した。ピンポールを貫入した感触では柱痕はさらに80cm下がる。掘形は、発掘深度がいたらず未検出である。

P5の柱痕は円形を呈し径40cm、検出面から深さ1.7mまでを確認し、P4と同様柱痕は51cm下がる。掘形は、P4と同じく未検出である。

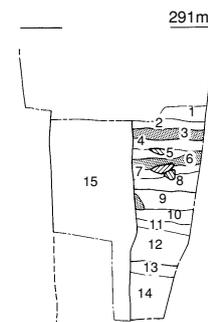
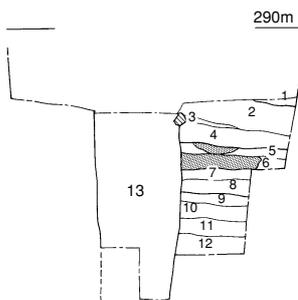
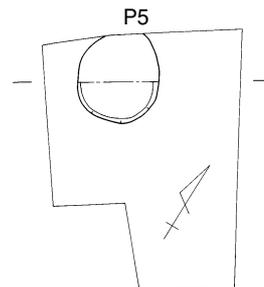
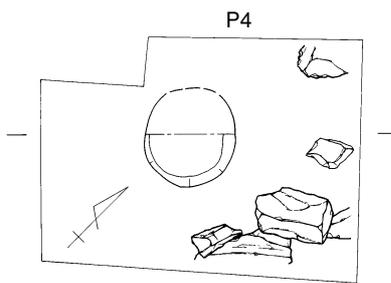
#### 版築土壘（第12図参照）

T6



1. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)、流土堆積層
2. 明黄褐色細砂 (10YR6/4)、灰白土混、版築層
3. 明黄褐色細砂 (10YR6/8)、版築層
4. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)
5. 灰白色微砂 (10YR7/1)、硬、柱の根巻き土
6. にぶい黄褐色細砂 (10YR6/4)、白色ブロック混、掘形埋土
7. 明黄褐色細砂 (10YR6/6)、掘形埋土
8. 黄褐色細砂 (2.5Y5/3)、掘形埋土
9. 明灰黄色細砂 (2.5Y5/2)、掘形埋土
10. 灰黄褐色土 (10YR4/2)、柱痕埋土

- |                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 黄褐色砂質土、硬、版築層           | 11. 黄褐色砂質土、やや軟、掘形埋土  |
| 2. 〃、やや硬、版築層              | 12. 褐色砂質土、掘形埋土       |
| 3. 黄灰褐色砂質土、版築層            | 13. 橙色土、掘形埋土         |
| 4. 黄褐色砂質土、(マサ土)、版築層       | 14. 黄褐色粗砂            |
| 5. 黄色砂質土、やや軟、版築層          | 15. 灰色土と橙色土の混合土、掘形埋土 |
| 6. 黄褐色砂質土、版築層             | 16. 褐色砂質土、柱痕埋土       |
| 7. 〃、版築層                  | 17. 暗褐色砂質土、柱痕埋土      |
| 8. 黄褐色砂質土と黄灰褐色、砂質土の互層、版築層 | 18. 灰白色砂質土、柱痕埋土      |
| 9. 灰色砂質土、版築層              |                      |
| 10. 黄褐色砂質土、掘形埋土           |                      |



1. 浅黄色土 (2.5Y7/3)、礫多
2. 黄褐色微砂 (2.5Y 5/4)
3. 黄褐色粗砂 (2.5Y5/4)
4. にぶい黄色微砂 (2.5Y6/4)
5. 灰白色微砂 (2.5Y7/1)
6. 5に浅黄色微砂混入
7. 明黄褐色土 (2.5Y6/6)、炭少混
8. 7に灰白色微砂含
9. 灰黄色細砂 (2.5Y7/2)
10. にぶい黄褐色微砂 (10YR7/4)
11. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)
12. 灰黄色細砂 (2.5Y6/2)
- 以上、全て版築層
13. 褐色粗砂、軟、柱痕埋土

1. にぶい黄褐色細砂 (10YR7/2)、炭混入
2. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)
3. 褐灰色微砂 (10YR6/1)
4. 2と同じ
5. 橙色微砂 (7.5YR6/8)
6. 3と同じ
7. 5と同じ
8. にぶい黄褐色微砂 (10YR5/4)
9. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)、  
橙色ブロック多
10. にぶい黄褐色細砂 (10YR6/3)
11. 黄褐色細砂 (10YR5/4)
12. 10と同じ
13. 灰黄色細砂 (10YR6/2)
14. 暗灰黄色細砂 (10YR5/2)、  
以上全て版築層
15. 褐色粗砂、軟、柱痕埋土



第11図 内側柱穴 平・断面図 (S=1/40)

第50壘状区間の版築土塁には、城壁線と直交方向に2箇所のトレンチを設定してT6とした。版築土塁の中間に位置するトレンチは、GL-80cm程で地山に達し、その勾配は28°である。版築盛土と地山との間は、旧表土や流土堆積を介せず地山直上から版築されており、層厚は3～18cmを測り、いずれも水平を指向して均質に硬く締まっていた。また、18層内にはやや粘性を帯びた黄灰色微砂がまとまって認められた。

版築土塁の上位に設定したトレンチでは、GL-140cm程で地山に達した。この地山は東門の城内側に露出している巨大な露岩と一連のものであり、高さ40cm以上の段となって傾斜変換している状況がうかがえた。

版築層は8層を境として上層と下層の土質が相異なるため、まず下層から述べたい。

8～11層にはアプライトの小礫や炭粒を多数包含し、11層では焼石が認められた。土質は8～9層の砂礫土がやや締まっているものの、10層以下の砂礫土や粗砂はもろく軟質である。また、断面形状自体も9層以下は皿状にたわんだ状況を示し、9層の上面でたわみを解消しつつ、さらに8層を盛土して平場を形成している。なお、第50壘状区間の地表面に小石が散乱しているのは、これらの層が崩壊と共に流出し露出したものと理解され、8～16層は版築層ではなく土石混合の造成土と考えるべきであろう。

次に上層は、造成土とは一転して層厚5cm前後の緻密な版築層（7層）となり、厚さ約25cmにわたり版築されていた。7層上の4～6層は各層が20cm以上もの厚い盛土となり、土質は細砂や粗砂を使用して硬く締まっていた。

盛土層より城内側には2段に積まれた石列と、地山直上に設置された石材を検出した。そしてこの石列の延長を確認するため、トレンチを東門側に拡張したところ3石分の石列を確認し、T8で検出された石列へとさらに連続する状況が窺えた（第5図参照）。小規模なトレンチに終始したため、これらの石列の性格を直ちに決定づけることは困難であるが、断面形状や石列の配置方法から見て城壁の後端を示す土留的な機能が想定できよう。

T6により城壁断面の規模を計測すると、外側列石から石列までの城壁幅は9.4mを測り、外側列石から4層上面までの高さは5.1mである。

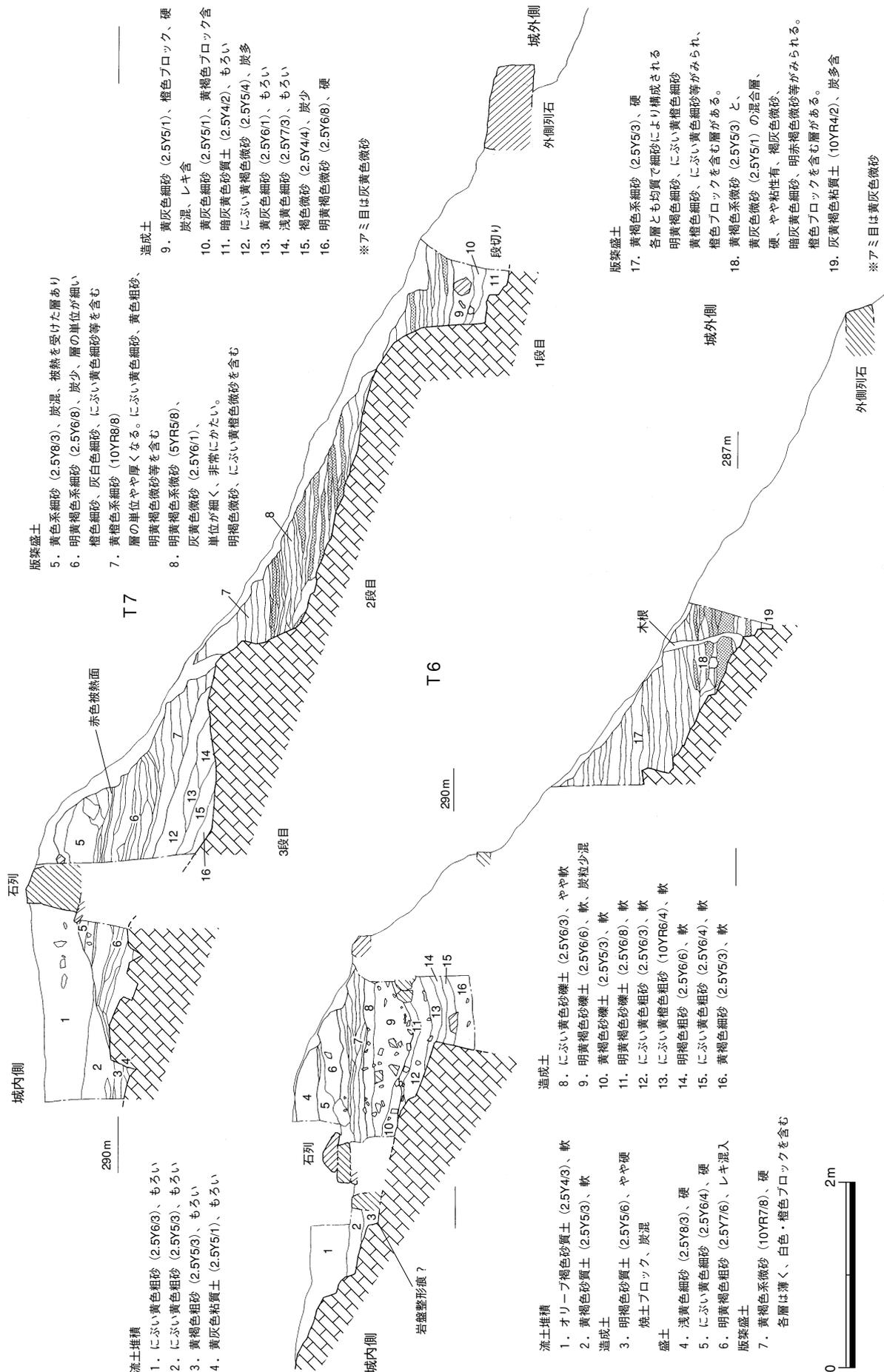
#### T7

T7は第52壘状区間に位置し、外側列石から城内側の石列に向けてトレンチを設定した。地山（花崗岩風化土）は地表面から30～180cm下で検出され、3箇所の段が認められた。

以下、トレンチの下位より順に説明したい。城壁の基底部には外側列石が設置されており、すでに傾斜しているが、外側列石の延長線から判断して原位置からさほど移動していないと推測される（第5図）。外側列石の背後には地山をL字形に整形した段切りが検出され（1段目）、その範囲は高さ1.25m、推定幅1.9mを測る。段切り内の下層には層厚8～25cmを測る9～11層が造成され、9層が硬く締まり10・11層が軟質で、いずれも版築層とは異なる土質であった。

9層より上位には版築盛土が築造されるのであるが、2段目の地山は段が内湾し、しかも版築層が地山と擦り付いているため、人為的に掘削された可能性がある。城壁の下部を主体に版築された8層は層厚2～10cmと薄く、微砂を主体として全体的に緻密で硬質に締まっていた。

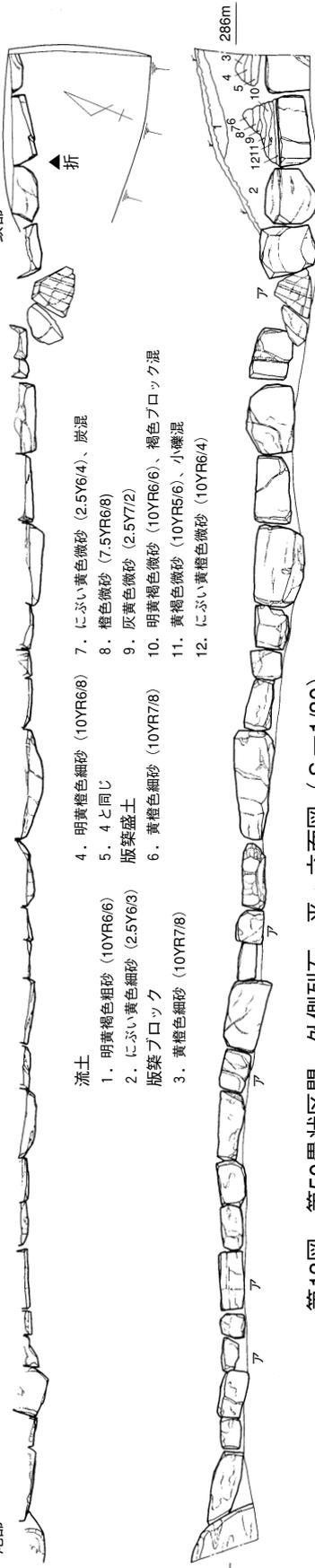
3段目の地山は不整形で凹凸が高低差65cmも認められることから、自然地形と考えられる。地山の間隙には傾斜しながら12～16層が造成されており、層厚は10～25cmを測りいずれも軟質であった。12



第12図 T6・T7の版築土層断面図 (S=1/60)

尾部

頭部



第13図 第50塚状区間 外側列石 平・立面図 (S=1/80)

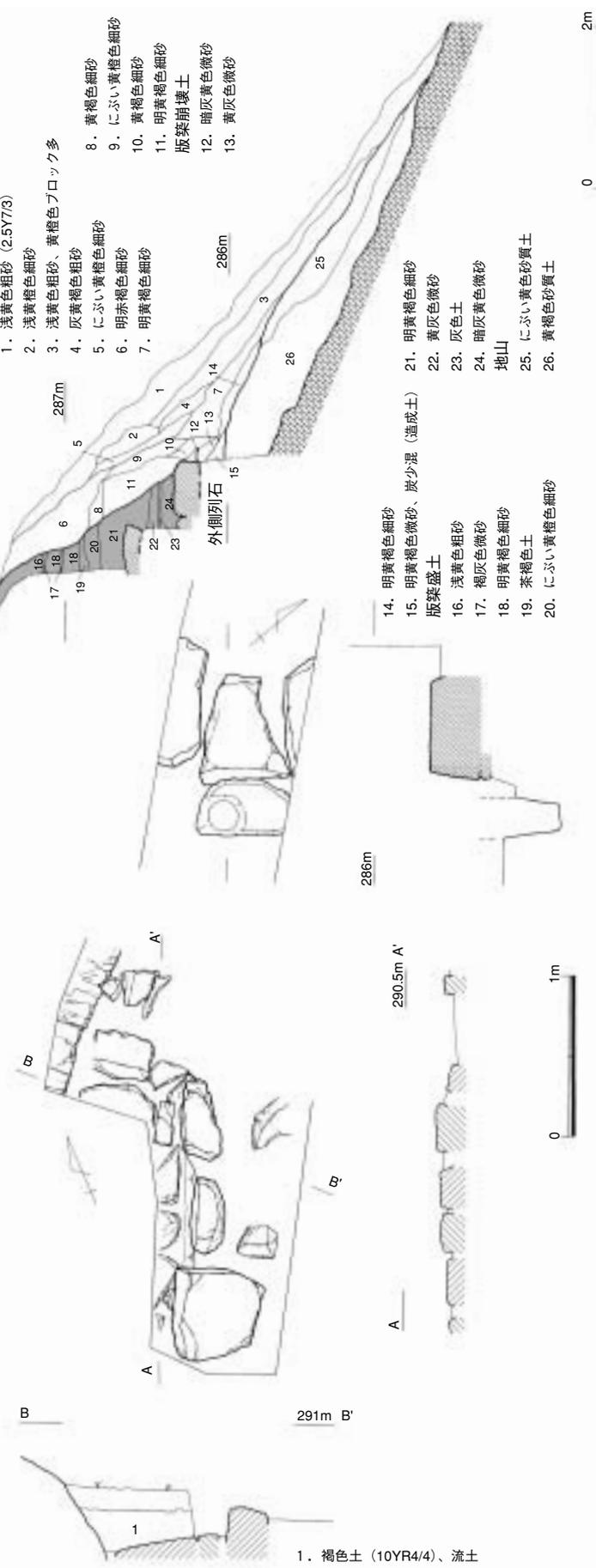
「ア」はアブラライト、他は花崗岩

流土

- 1. 明黄褐色粗砂 (10YR6/6)
- 2. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3)
- 版築ブロック
- 3. 黄褐色細砂 (10YR7/8)
- 4. 明黄褐色細砂 (10YR6/8)
- 5. 4と同じ
- 版築盛土
- 6. 黄褐色細砂 (10YR7/8)
- 7. にぶい黄色微砂 (2.5Y6/4)、灰混
- 8. 橙色微砂 (7.5YR6/8)
- 9. 灰黄色微砂 (2.5Y7/2)
- 10. 明黄褐色微砂 (10YR6/6)、褐色ブロック混
- 11. 黄褐色微砂 (10YR5/6)、小礫混
- 12. にぶい黄褐色微砂 (10YR6/4)

流土

- 1. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/3)
- 2. 浅黄褐色細砂
- 3. 浅黄色粗砂、黄褐色ブロック多
- 4. 灰黄褐色粗砂
- 5. にぶい黄褐色細砂
- 6. 明赤褐色細砂
- 7. 明黄褐色細砂
- 8. 黄褐色細砂
- 9. にぶい黄褐色細砂
- 10. 黄褐色細砂
- 11. 明黄褐色細砂
- 版築崩壊土
- 12. 暗灰黄色微砂
- 13. 黄灰色微砂



第14図 T 8 敷石 平・断面図 (S=1/40)

- 1. 褐色土 (10YR4/4)、流土

版築盛土

- 14. 明黄褐色細砂
- 15. 明黄褐色微砂、灰少混 (造成土)
- 版築盛土
- 16. 浅黄色粗砂
- 17. 褐灰色微砂
- 18. 明黄褐色細砂
- 19. 茶褐色土
- 20. にぶい黄褐色細砂
- 21. 明黄褐色細砂
- 22. 黄灰色微砂
- 23. 灰土
- 24. 暗灰黄色微砂
- 地山
- 25. にぶい黄色砂質土
- 26. 黄褐色砂質土

第16図 T 5 断面図 (S=1/80)

～16層はこうした不整形な地山の形状をまず解消し、版築作業を容易ならしめるための造成土として施されたものである。8層上に版築された7層は層厚6～15cmを測り、土質は細砂を主体として均質に硬く締まるなど、8層とは層厚や土質に相異が認められるため、版築の単位を示すものと推察される。

6層は7層以下の版築層と較べて全体的に層厚が薄く傾斜しており、一部には断面形状が皿状となる層が認められるほか、熱影響を受け赤化した版築層も確認した。

最上層となる5層は層厚約30cmを測り、ブロック状の土塊も含まれている。層中には内側列石と同じ手法で石列が設置されており、石列から城内側へは15°の下り勾配で、版築盛土の上面が傾斜していた。

T7より城壁断面の規模を計測すれば、外側列石から内側の石列までの幅が約9m、高さは5.3mを測る。

#### 第50壘状区間の外側列石（第13図参照）

外側列石は概ね良好に残存しており、いずれも石面と上端を揃えて直線的に配置されている。外側列石は尾部から頭部にかけて78cmの高低差があり、全体に水平を意識しながら小段を形成し、徐々に下降させていた。

外側列石には石面幅が28～120cmまでの石材を使用し、尾部から頭部にむけて規模の大きな石材を配置している傾向があり、列石数は29石を数え、材質は未確認の3石を除いて花崗岩21、アプライト5である。

外側列石の規模を頭部の折をもとに計測すると全長は $16.4\text{m} + \alpha$ を測り、第51壘状区間との内角は165°内折する。

#### T5（第15・16図参照）

東門の南西側斜面は周辺地形に較べて一際高く張り出し、版築盛土の残存状況と外側列石が埋没している可能性を調べるためT5を設定した。

トレンチの下半には硬く締まった地山の25、26層を検出した。26層の上端は城壁築造前の作業により削平を受けて水平となり、上位には15層が造成されていたが、層自体すでに傾斜しており、造成層の大半は流出したと考えられる。

トレンチ内では外側列石を3石確認し、わずかではあるが石材を縦長に使用している状況がうかがえた。また、外側列石の前面には長さ55cm以上、幅35cmを測る不整形な形状を呈した柱穴掘形を検出し、南西側に偏在して径24cmを測る柱痕を確認した。この柱穴は外側列石との位置関係や柱痕の規模からみて版築用の支柱と考えられる。

外側列石より上位には版築盛土が60°の勾配で検出され、高さ約2.1mの位置で緩傾斜となっているが、全体的にみれば版築盛土の残存は極めて良好で、瘤状に張り出した不自然な地形は、版築土塁の残痕を反映していることが改めて判った。

版築層は粗砂、微砂、細砂を使用して水平方向に版築し、いずれも均質に硬く締まっていた。なお、版築土塁の前面で確認した8～13層は、版築層がブロック状に滑落したものである。

#### T8（第14図）

T8は東門の右側石垣の城内側端部と接するように2箇所の小トレンチを設定した。遺構は石列と内側敷石を3.5m分検出し、T6の方向へと連続するものと予想され、対する左側石垣から延びる石列の形状と対称形になる。検出された石列は石面長42～54cm、控え長24～48cmを測り、石面を城内側

に揃え横長に配置されている。石列と露岩までの間には約70cmの幅があり、この間に内側敷石が敷設されていた。

内側敷石は石列の上端より約20cm低い位置に敷設されている。敷石の勾配をみると、第14図のB断面では城内側へ約10°傾斜させ、さらにA断面ではA側（至第4水門側）に向けて5°傾斜させており、雨水を城門内へ流下させない配慮がうかがえる。

#### 参考文献

- 『総社市埋蔵文化財調査年報』5 総社市教育委員会 1995年  
『総社市埋蔵文化財調査年報』6 総社市教育委員会 1996年  
『総社市埋蔵文化財調査年報』7 総社市教育委員会 1997年  
『総社市埋蔵文化財調査年報』9 総社市教育委員会 1999年

註1 大野城で新たに発見された城門には、門礎に加工された軸摺穴に鉄錆が確認され、基肄城東北門に所在する門礎、そして水城の門礎にも鉄錆が付着している。

城戸康利「大野城・新発見の城門」第33回古代山城研究会 2006 発表資料

鏡山猛「基肄城」『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版 昭和58年

鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 昭和43年

註2 蹴放しの側面を研磨した可能性は低いように思われる。

註3 和田晴吾「石工技術」『古墳時代の研究』第5巻 雄山閣 1991年

註4 本来、内側列石は内側柱穴の城内側に接して配列され、その内側に内側敷石が敷設されている。しかし、東門の場合はT8で検出した石列や、内側敷石のように内側柱穴から2.5～3.5mも城内側に配置されており、通常の版築土塁とは異質で城門付近の特殊事情を反映しているのかもしれない。

ただし、西門や南門のように内側敷石が上下2段に敷設されている箇所もあり、東門も類似形態となる可能性もある。そのため東門の石列については直ちに遺構の性格を決めがたいので本文では暫定的に「石列」と呼称しておきたい。

註5 現在、内側柱穴P4・5からT8までの土塁頂部には小規模な石材を使用した敷石が部分的に露出しており、西門や南門と同様に城門の周辺には2段に内側敷石が敷設された可能性がある。